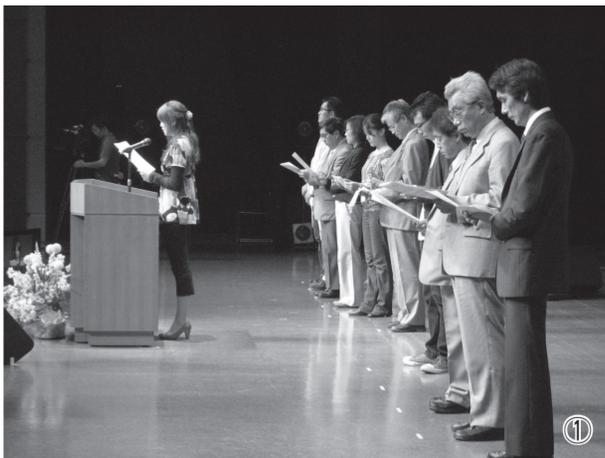


第5回日本伝道会議報告



「危機の時代における宣教協力 -もっと広く、もっと深く-」

協力関係 継続重視し次回へ

第5回日本伝道会議(=JCE5、原田憲夫実行委員長、中島秀一会長)が9月21~24日、北海道札幌市の札幌コンベンションセンターで開催。テーマ「危機の時代の宣教協力-もっと広く、もっと深く-」を教会はどのように受け止め、対応していくべきだろうか。4日間のプログラムを通して話された日本宣教の課題と可能性を報告する。(特集7面まで)



00年、沖縄で開催されたJCE4では、「和解の福音」を掲げた「沖縄宣言」を採択。地域間の教会協力、家庭の再構築、地域環境保全の戦い、神なき政治勢力との戦いなど、教会と時代・社会の課題が強調された。しかし、JCE5までの9年間で「協力が進んだ分野もありつつ、かけ声だけで終わった分野も多かったことは認めねばなりません」と、竿代照夫氏(JCE5企画推進プログラム局長)は語る。

- ①参加者から老若男女10人が登壇。順に札幌宣言文を読み上げた ②2000人を超える牧師、信徒らが参加 ③三浦光世氏も旭川から駆けつけた ④青年大会で講師として若者を鼓舞した安藤理恵子主事(キリスト者学生会) ⑤札幌観光協会によるクラーク博士の紙芝居も ⑥会場となった札幌コンベンションセンター ⑦三橋幸子氏(札幌キリスト福音館)が子どもたちの祝福を祈った ⑧札幌・旭川教会連合聖歌隊による賛美

エクトチームを立ち上げて議論を進めてきた。「日本文化と宣教(日本宣教が抱える課題・壁について、文化人類学的・宣教学的視点から分析、宣教的提言を行う)」「地方伝道(7面参照)」「地域的宣教協力(各地の教会間協力のネットワーク、地域のネットワークなどの取り組みを調査・評価し、宣教協力の助けとしての超教派活動の可能性を模索する)」「教会・教団間協力(牧師のトータル・ケアの取り組みについて情報交換、引退牧師など人材の積極的活用と、今後の連携の

▼ 基調講演要約

「日本開国とプロテスタント宣教150年」

東京基督神学校校長 山口陽一氏



今年、日本におけるプロテスタント宣教は、宣教師の長崎・神奈川上陸から数えて150年、ベッセルハイムの琉球伝道からは163年目を迎える。キリシタン禁制の闘いの中でなされた本格的な伝道ということにおいて、琉球伝道は日本プロテスタント宣教の始まりにふさわしいと思う。「宣教150年」と言っても、それは一様ではない。実はここに、日本プロテスタント史の根

をすることができたのは主のあわれみ。それゆえ、私たちは悔い改め、主にのみ礼拝をささげる教会として伝道と奉仕に励みたい。150年前、固く閉ざされた戸をこじ開け、石地を耕すことから始まったプロテスタント宣教は、今日61万5千918人の信徒と8千235の教会を拠点に新たな歩みを始めようとしている。主にあつて、感謝と悔い改めを共にした私たちは新たな献身を誓い、この危機の時代にこそ神の御力に頼り、もっと広くもっと深く宣教協力を進める。過去に多くの聖徒たちを用いられた主が、これからの日本と世界の宣教のために、主の栄光のために、私たちが用いてくださいますように。

「危機の時代における宣教協力」

イムマヌエル総合伝道団代表 竿代照夫氏



民族間対立、地球環境悪化、経済不況など、世界は「危機的状況」にあるが、日本の教会は、停滞あるいは後退の状況にある。今こそ「宣教協力」が急務であり、その現実性と継続性が鍵である。「存在していないものを創り出す」という理想論ではなく、小さくはあっても既になされている協力の形を更に発展していく」という思いから、第5回伝道会議では、「既になされている宣教協力」の諸分野を15のプロジェクト

できない広い交わり、広い活動に貢献する。③ディノミネーションリズム(教派エゴ)から協教主義へ、各教派が自らを絶対視したり、自己完結的になるのではなく、互いの特色と強調整点を認め合い、尊敬を払いながら、協力関係を深めることが大切である。また、一つの教派・教団・教会では届き得ない分野の伝道のため、多くの教派・教団・教会が協力して支えていくというのが、本来の「協教的」伝道のあり方ではないだろうか。主イエスは、最後の祈りの中で、弟子たちの一致を祈られた(ヨハネ17:20-21)。私たちが本当の意味で「一つとなる」ことが伝道の進展の鍵である。願わくはこの伝道会議において、主が祈られた祈りの答えが目に見える形で与えられますように。